

Trial & Error

トリアル・アンド・エラー

No.86

試行錯誤



小田原で開かれたアジア市民フォーラムにJVCは積極的に参加した(© 西村昭廣)

特集 JVC 神奈川

JVC 神奈川の活動 海外と地域を結ぶ架け橋として	2
神奈川県とJVCの9年間	4
神奈川県の民際外交	6
「NGOフォーラム」打ち明けばなし	8
KISを知っていますか?	10
KIS in 横浜 in 神奈川 in 世界	12
難民の自立を防げるもの	14
いがらし君の難民キャンプ潜入記②	16
みんなで面白いことやりませんか?!	17
シリーズ NGO活動を見直す	18
アジア民話の旅 ラオス 月の中の人間	19

海外と地域を結ぶ架け橋として

JVC 神奈川代表 山口 誠 史

南北問題は、南の国々の怠情や汚職や教育水準の低さにあるのではなく、格差や社会的不公正の仕組みをつくりそれを拡大再生産する北の国の側にこそより大きな問題がある、と言われる。そのことは、海外での活動を経験した者にとってごく自然に理解できる。南北格差を埋めるには、日本社会をはじめとした北側の先進工業国が飽食や浪費の体質を変えねばならないということに、海外で活動をして帰国した多くのJVCのボランティアが気が付いているのではないだろうか。ただ残念なことには、せっかく個々のボランティアが海外での活動から多くの事を学んでも、それが個人の経験に留まってしまうことが多い。体験したことを広く日本社会に訴えて、それによって人々が日本こそ変えていかねばならないということを理解することが重要である。

JVC 神奈川の活動は、海外に於けるJVCの活動を日本社会にフィードバックすることにある。JVCの海外での活動を広く知ってもらい、1人でも多くの人に第三世界への関心を持ってもらうこと。日本にいるとなかなか見えてこない社会の矛盾や不公正に人々が気が付き、それを克服していく手段としてのNGOの役割を理解して支えていこうと考えること。そうした日本国内での社会的な支持を得て、はじめてJVCの海外での活動も活かされることになると思う。

JVC 神奈川は、1987年5月に神奈川県の外郭団体である財団法人国際交流協会の中に開設された国際交流協会の施設の一部である国際交流コーナー「KIS」(Kanagawa Information Station)の一角に机と電話を間借りするという形で仕事をしている。

JVCが県の施設の一部を借りて活動を開始できたのは、「民際外交」を旗印に掲げる神奈川県が民間の活力を利用してさらに強力に市民レベルの海外協力を進めようとしたことがきっかけになっている。

このような行政と民間団体の連携は、行政にとっては型にはまった発想とは違った視点から生まれる企画を共同で行えるというメリットがあり、一方民

間にとっては苦しい財政の中で施設を利用できるというメリットがある。

国際交流コーナーKISというのは、海外交流を中心とした様々な分野の市民グループの情報を集めて発信していく情報ステーションの機能を持つ。ここには、様々な人々が集まって来る。彼らの興味や活動分野は多様であり、時として議論がかみ合わないこともある。しかし、そのような異なった価値観や立場の人々が出会い、論じ合い、共同作業を行うことによって、新しい可能性とネットワークの輪が広がっていく。

JVC 神奈川の開設とKISの開設とは、ほとんど同時であった。JVC 神奈川のオフィスとしての準備をしつつ、KISをどうやって運営していこうかと国際交流協会の荻村氏と話し合った。そしてJVCのネットワークを利用してKISの情報を流したりまた情報収集をしたり、KISに情報を求めて集まってきた人たちにJVCの事を知らせたりと良い意味でKISとJVCの連携プレーがあった。

定住難民プロジェクト

神奈川県は、インドシナからの定住者が最も多く住んでいる県である。そのせいもあって、県内には定住難民を支援する市民グループも多くある。従来東京事務所で行っていた定住難民に対するプログラムのコーディネートは、JVC 神奈川の開設にともなって神奈川に移った。それは、単に対象者やボランティアの数が神奈川に多いというだけでなく、東京事務所がJVC全体の方向性を決めたり、財務や広報を行ったりする本部機能を有するのに対し、JVC 神奈川が地域に根付いた国内活動を展開するための拠点として位置づけられているからである。

定住難民プロジェクトは具体的な対象者を持つ国内プロジェクトであり、一般の人々に参加を呼びかけるのにも分かりやすい。しかも、JVCの場合は他の多くの市民グループと違い、インドシナ難民とは国境の難民村からタイ国内のキャンプ、さらにパナ



ニコムの日本定住直前の人々と、一貫して関わっている。神奈川の地の利を生かして、他の市民グループとのネットワーク作りや県内在住難民の実態調査を実施すると同時に、タイ国内やカンブチア内部での活動と関連づけながら難民問題を国際的な枠組みの中で捉えていきたい。

アジア市民フォーラム

JVC神奈川の1年7カ月（1988年末まで）の活動を振り返ってみると、最初の1年間は「アジア市民フォーラム」で明け暮れたといえる。フォーラムの詳細については、別の方が書かれているのでここではJVCとの関連に関して触れておきたい。

フォーラム自体は、1988年3月19～21日の3日間に小田原市で開催されたが、準備には1年以上前から取り組んでいた。JVCはその最初の時点から参加していて、実行委員会及び事務局の中心メンバーとして市民とNGOによる手作りのフォーラムの準備に携わった。特に、事務局がKISに置かれたこともあり、昼間他のフォーラム事務局スタッフがいない間はJVCの仕事と掛け持ちでこなさなければならなかった。慌ただしい1年ではあったが、多くの人々が出入りし討議を重ね共同で作業をしていく中で、様々な領域の人々と知り合えたことは、JVC神奈川のその後の活動に非常にプラスになった。

このフォーラムは、海外からも5人のゲストを招いて行った国際会議であった。JVCはそのうちの保健医療の分野につき、海外ゲストの受け入れをSHAREとともに担当すると同時に、5人の海外ゲストに関する全体的対応を事務局の中で引き受けた。さらには、フォーラムのメインプログラムである分科会の中で「定住難民」のコーディネーションも行った。

チャリティーウォーク

南北問題なんて難しいという人がある。また、海外の事なんか自分には関係ないという人もいる。そんな人でも「秋の横浜を歩いてみませんか？」と呼



びかければ参加する可能性がある。そのときに、「ただ歩くだけでなく、アジア・アフリカの人々への支援を目的にしています」と付け加えることにより、第三世界に関心を持ってもらうきっかけになる。

このようなイベントは、JVCの活動を含めたNGO活動全体を社会に広く知ってもらうことにつながる。多くの人にきっかけを提供し、たとえわずかでもその後継続して関心を持ち続けてくれる人がいることを願っている。

1987年、88年と2年連続して開催した「チャリティーウォークかながわ」は、KISに集まる人々とともに作っていったイベントである。2回目のチャリティーウォークでは、収益金の寄付先を前年のJVC単独から、シャプラニール、サヘルの会をはじめとした5団体に増やし、より広がりをもたせることを狙った。また、「アジアと出会うフリーマーケット」という20団体以上のNGOが参加したプレ企画も実施した。ここでは、講演会やシンポジウムなどの硬い企画の他に、ビデオ上映、手工芸品販売、アジアの料理販売、などの柔らかい企画も組み合わせて行った。

スタディーツアー

1988年の夏には、JVC神奈川独自にエチオピアへのスタディーツアーを企画し、県内を中心に6人の市民がJVCエチオピアのプロジェクトサイトであるマーシャ村まで訪れた。

この企画は、前年の大雨期に極端に雨量が少なかったために心配された飢餓の再発を訴えた、エチオピアキャンペーンの一環として実施した。具体的には、①新聞報道による一般市民への概要報告。②より詳しい情報を知りたい人への講演会の開催。③現地を自分の目でみたい人へのスタディーツアー参加の呼掛け、という3段階のアプローチの最終ステップのわけである。このように、一般の人々に第3世界への関心を訴えるときには、個々の人にとって参加できる多様な機会を設けることが重要である。

神奈川県とJVCの9年間

JVC事務局長 星野昌子



インドシナ——出遇い

JVCがバンコクで発足した年の11月、長洲一二神奈川県知事が、サートンに在った日本人会内の一室に設けられたJVC事務所を訪問された。「インドシナ難民とタイの恵まれない子供達のために」と2600万円をお持ちになったのだ。折しも国際児童年に当って、「ともしび」に代表される県民運動母体を通しての募金や、県下の幼稚園児とお母さん方が持ち寄った1円玉も大変な額にのぼったことを話され、知事の提唱する「民際外交」の一部を占める、海外協力への具体的行動の必要性を説かれた。翌日はパナニコムのトランジット・センターで当時活発に行われていたレクリエーションのプログラムに参加され、子供たちと手を取りあって、「アヒルの行列」を歌ったり、踊ったりして楽しまれた。まだ国連からの寄託金もなしに、細々と日本の市民から寄せられるお金を頼りに活動をしていたJVCにとって、そして活動の対象者である子供たちにとって、この神奈川県からの資金は全くの慈雨であったと言える。

その後永きに亘って、難民キャンプとクロントイスラムや農村における教材、井戸掘り、保育園運営その他様々な用途につかわせていただいた。こちらからもできる限り詳細な報告書を送付すると同時に、現場からの帰国者が県の担当課に報告を行った。インドシナ難民のタイ流入を契機とする、神奈川県とJVCの記念すべき出遇いであった。

エチオピア——再び接点

それから4年後、1984年にはアフリカの干ばつや内戦、それによる大量の餓死者や逃げまどう被災民の様子が日本でもつぶさに報道されるようになった。JVC/SHAREも夏にはモザンビーク、ケニア、ジンバブエに医師を派遣して調査を行った。そしてこのアフリカの危機が、神奈川県とJVCの2度目の接点を作ることになった。

JVCが予定した最後の調査地、エチオピアを筆者が訪れたのは11月。北部の言語を絶する惨状に応えて、緊急医療救援活動を開始するため、エチオピア

政府と交渉の末12月に合意書を取り交わして帰国して間もない頃であった。神奈川県県渉外部国際交流課からのアプローチがあり、話し合いに臨むと「県は先回のインドシナの時には、お金を寄付することで事態に対応したが、今回はもう少し、物資やお金だけでなく、リスクも大きいが人を送りたいと考えています」とのこと。JVC内で討議した結果、この御提案は人材不足の折から非常に有難いと同時に何点かの検討事項も出て来た。例えば県立病院から応募してこられる医療関係者の方々は、あのすさまじい現場の生活環境にはたして堪え得るであろうか。JVCに参加するその他のメンバーは組織から派遣されるわけではなく、個人の意志に基いて、仕事を辞めたりして個々に参加するわけだが、この人々と県派遣の方々とが融和できるのかどうか等、正直に申していろいろな危惧もあった。しかし神奈川県の意志は固く、双方慎重に準備を進めるなか、県職員の公募が行われ、その結果3月には吉野浄、鈴木妙子、太田律子の三氏が大量の希望者の中から選ばれて、派遣が決定した。査証等必要な手続きも完了して、5月には現地入りを果たした。(それ以降については『JVCアジバール病院—エチオピア緊急医療救援報告』(連合出版)に詳しい)

「案ずるより産むは安し」とは、このようなことであろうか、参加された県職員の質の高さもさることながら、恐らくアジバール病院における、想像を絶する多様にして緊急な需求を目の前にして、関わった人々は全身の力をふるい起して、一丸となって事に当たったのであろう。無事6カ月の活動を終了して帰国した県職員の3氏と知事を囲んで関係者一同が祝杯を挙げ、喜びに溢れた。

再び手をたずさえて働く日は

インドシナとエチオピアにおける以上の二つの活動は神奈川県の民際外交の一環として繰り広げられる諸事業の中のはんの一部分に過ぎない。神奈川県は、いわゆる姉妹都市等との友好交流から、それらの地方自治体による具体的な国際協力への関心を強

めているようだ。先進諸国においては地方自治体が第三世界のNGOs、及び自国のNGOsと連繋して、二国間の政府援助では実施不可能な開発協力に実績を挙げている。JVCは神奈川県のこの分野での今後に大に関心を寄せると同時に、将来その実施に当たっては、県にとってパートナーとして動き得るNGOsの一つとして、その場しのぎの緊急援助のみならず、本質的な開発協力にも手を組んで参加できる実力を蓄えていきたいと願っている。しかし、「国（県）内にもまだ問題は山積みしているのに、なぜ国際協力なのか」という県民の声が多いのも事実だ。横浜港という世界に開かれた場所と、多くの外国人居住者を抱えるがゆえに、おそらく日本一進んでいるであろう国際、民際感覚の持ち主たる神奈川県民でさえ、日本人の「国内志向」からまぬがれないようである。したがって今後とも時間をかけて、県民の理解と意識を高めて行くための開発教育に力を入れなければならないだろう。むしろそれは県ばかりでなく、各NGOとしても取り組まざるを得ないことだ。

地域に根ざすために

以上述べて来たような、NGOを通じて第三世界の草の根と県民とのつながりを作り出す活動も、地域から切り離された形ではその意義は薄れる。人々が世界的視野で感じ、考え、行動することが地域にしっかり根をおろすために、神奈川県は大きな努力をはらいつつあると思われる。国際平和年、青年年等を契機に県内の大小NGOs市民グループ等の存在が顕著になるにしたがって、これらと自治体とのつながりを、その年々に終了させることなく、恒久的に場を提供して情報を集め、そして発信することを始めた。知事の提唱にしたがって、10年前に設立された（財）神奈川国際交流協会の事業の一つとして、産業貿易センタービル9Fの一室にKIS（かながわINFORMATION STATION）が開設されたのは一昨年の春である。発足当時から常に活気を帯びて、人の出入りは激しく、情報の発信地であるばかりではなく、数々の活動を生み続け、自己増殖が続いている。JVC神奈川もこの部屋の一隅を利用させていただき、感謝している。

1987年3月5日から7日にかけて小田原で開催された「アジアNGOフォーラム」はKISが生み出した成果の代表的なものと言えよう。権限を持つ人のお声がかかりではなく、個人の自由意志で寄り集った

人々が長い時間をかけて練り上げ、下から上へと造り上げるそのエネルギーは県にとっても目新しいものようであった。JVCも事務局に参加、私自身も実行委員長としてこのフォーラムに関わらせていただいたことに感謝すると同時に、多くのことを学んだと感じている。

1カ月前、KISのある同じフロアで行われた国際会議に出席した。休憩時間にKISを見学したジュネーブからの国連職員が、「日本にもこのようなNGOsの拠り所があって、国際的視野で行動しようとする人々の群れが存在していることを知っただけでも非常に嬉しい。このような拠点には国境を越えて共通のふんいきがある。暖かく、くつろいで、なおかつ前へ進もうとする熱気を感じる。日本には存在しないのかと思っていた。そして地方自治体がそれを支えているということも素晴らしい」と述べておられたのは印象的だった。

地域に根ざす県のご努力に「内なる民際」と称せられる部分がある。県に在住する様々な外国人との共生を考えようとする動きだが、この分野においても、インドシナからの定住者のためのプロジェクトを継続しているJVCは、県の県民部、福祉部等と情報を密に取り交わし、調査等にも協力している。

県下には、JVC以外にも様々なグループが定住者に対する日本語教育、生活相談等の活動を繰りひろげて誠に心強い。日本社会の閉鎖性はインドシナからの定住者にも圧迫を加えて諸問題を生み出しているが、何といたってもその歴史は1975年以降十数年で、他の在日外国人についての諸問題に比べれば問題の根は浅い。それに他国に比して受け入れ数も少なく5500人ほどしかないのだから、何とか関係者のネットワークを強めて、活動の成果を期待したい。

JVCはこの人々が自国を離れて以来たどった地点—国境—ホールディングセンター（ノンカーイ、ウボン、バンビナイ、カオイダン等）—トランジットセンター（ドンムアン、スワンブルー、パナニコム）—そして国内—において1980年以来この人たちに関わって来た。そして今では彼らの自国、カンブチアやラオスでも既に開発のプログラムが進行している。定住者の自国訪問や難民の帰還が活発化するとと思われる1989年以降、JVCがその経験と活動の拡がりのなかで県と協力して、問題の恒久的解決に貢献できることが少なくないと感じている。

神奈川県民の国際外交

神奈川県渉外部国際交流課

I 国際外交の提唱

国際外交のねらい

神奈川県では、「地域に根ざし、世界に開く」ということで、「国際」に対する「国際」外交を提唱し、国境を超えた市民レベル。地域レベルの交流の推進に10年あまり取り組んできた。とくに、横浜開港以来、諸外国との文化、経済・技術交流、在日外国人とのかわりなど常に日本の国際化を先導してきた土地でもある神奈川は、この特性をいかし、世界に開かれた地域社会づくりをめざしてきた。

さらに、いま国境を超えたヒト、モノ、カネ、情報の交流は予想をはるかに上回る勢いで進み、もはや諸外国との友好関係なしには私たちの生活そのものがなりたたなくなっている。こうした急速な「国際化」の動き、しかも世界との結びつきが非常に複雑となり、価値観も多様化している現在、国際化のチャンネルも多元的、重層的につくりあげることが必要になっている。

その基本は、「G to G」(Government to Government)の国家間の外交であるが、それを支え、補強していくためにも、「L to L」(Local to Local)といった地方同士の交流、さらに「P to P」(People to People)や「B to B」(Business to Business)などの市民同士、企業同士の交流が非常に重要な役割を担う時代になってきている。

また、「世界のために何ができるか」を考え、「世界を必要とする日本」から「世界に必要とされる日本」にしていくため、神奈川から国際社会への貢献の道を探ることも国際外交の初期からのねらいであった。

交流事業のあゆみ

1976年7月、全国に先がけ県の渉外部内に国際交流課を設置、さらに市民レベルの交流事業を促進するため翌1977年2月に(財)神奈川県国際交流協会を設立して、国際理解や各種の交流事業、民間交流団体、市民グループの支援などを進めてきた。

海外地域との交流としては、1981年4月にアメリカのメリーランド州と、1983年には中国遼寧省とそれぞれ友好提携の調印をしている。とくに遼寧省と

は、その協定のなかに日中両国民は再び戦争を行わないことをうたう「不戦の誓い」をいれている。そのほか、スウェーデンのエーテボリ・ブーフス県、マレーシアのパナン州、西ドイツのバーデンビュルテンベルク州、ソ連のオデッサ州など世界の各地域との交流事業が進められてきた。

この間、活動分野も当初の友好を中心とする内容から、特定のテーマを中心に文化、スポーツ、教育、医療・福祉さらに経済・技術交流へと広がり、その担い手も多彩なものとなっている。

また、平和・軍縮、飢餓・貧困、人権、環境、南北問題などテーマにした国際会議を支援し、世界の各地域の人々が共通の課題を議論する出会いの場を提供するなど、地球的規模の問題群に神奈川からの貢献の道を探ることも重要な仕事としてきた。

II 今後の重点課題

内なる国際化

外に向かったの交流と同時に、私たちの足元での国際化を進めることは日本社会にとっても非常に重要な課題である。

いま、神奈川には100を超える国々のおよそ5万人の外国籍の人々が暮らしている。これらの人々が同じ地域に住む住民として、暮らしにくいというのではおかしい。むしろ多彩な構成員がいてこそ活力のある社会である。神奈川のメンバーとして、外国籍の人々も県民と同様に権利が守られ、伸び伸びと活躍できなくてはならない。そうした視点で、神奈川県では1980年から「内なる国際外交」にも取り組んできた。

1983～84年には外国籍の人々の全体の約80パーセントにあたる在日韓国・朝鮮及び中国の人々の実態調査を行い、1987年10月からは、県庁内のこの問題に関係してくる教育、労働、福祉など計28室課からなる「外国人県民施策推進会議」を設置して、諸制度の見直しと具体的な改善策の検討に入った。その成果の一つとして、外国籍の人たちにも県職員採用への職種枠を開いたところである。

同時に、県民の皆さんの理解も不可欠なため、県では、在日韓国・朝鮮の人々の歴史と生活の諸問題



たみちゃんシリーズもう第4冊目を数えるようになった

をわかりやすく叙述した冊子『ともに』を作成し、学校や市民に配布している。

この問題に関連し、自治体として「国際人権問題」にどのような貢献と取組方策があるかの研究も1986年から進めている。1988年の世界人権宣言40周年には、「地域から国際人権を考える」をテーマに内外からの参加者を得て国際シンポジウムを開催した。そして、このシンポジウムでも大きな問題となったのが、最近のヒトの国際化にともなう難民、留学生、外国人労働者にかかわる課題である。

インドシナ難民は、日本定住者の約3割、1700人がこの神奈川で暮らしている。大和の定住促進センターの機能を補うため、JVC神奈川をはじめ、熱心なボランティアグループが難民の日常生活と日本語修得の援助にあたり、県もその活動の一部を支援している。

昨今の円高もあり、暮らしにくい日本が大きくクローズアップされたのが留学生である。このままでは21世紀に10万人の留学生を受入れようという国の計画も危ぶまれるところであり、何よりも将来の日本と世界とを結ぶ貴重な国際的なかけしをつぶしかねない。現在県内には約1260人の留学生がいるが、かれらが精一杯勉学に努め、日本にいい思い出をもって帰国できるよう、留学生の生活の場である自治体としてその支援策を検討中である。

さらに、現在最も緊急かつ難しい問題になりつつあるのが外国人労働者である。外国人労働者に関する入国や法制度については国の問題としても、では、「人間」としての外国人を人間の生活の場である自治体がどう受け止めるか、今後県としてもこうした面から検討していきたいと考えている。

民際協力

神奈川の民際外交のもうひとつの新しい柱が「民

際協力」、とくにアジア地域での民際協力の展開である。「交流」も大事だが、ある段階からは具体的課題を通しての「協力」で裏打ちしていくことが必要である。

すでにこれまで、アジアを中心に第三世界への理解を深めるため、NGOや開発教育に携わっている人たちの協力を得ての『たみちゃん』シリーズの発行や、県民を対象とした国際理解講座、あるいは海外技術研修生の受入れ、中国への技術指導者の長期派遣などが行われてきた。

また、第三世界への民際協力を進める上で見逃せないのが民間・NGOの活動である。神奈川では財神奈川国際交流協会のなかに、交流コーナーKIS (Kanagawa Information Station)を設置し、市民の交流事業の情報交換や民際協力活動を進める場として活用してもらっている。

1988年3月には、このコーナーに集まる人々が中心になって「市民とアジアを結ぶ国際フォーラム」が開催されるなど市民レベルでの活動も多彩な広がりをみせ、神奈川の新しい民際協力のネットワークの場として期待されている。

また、将来的には自治体とこうしたNGOが手を組むことで、政府レベルのプロジェクトとは違って、より現地の人々に近い形で確実に届けられるような新しい対外援助の型をつくれぬか、いわばLocal版ODAといったものの構想もこれからの課題となっている。

国際社会での役割

地球的規模で政治・経済・社会の大きな構造的な転換が進むなかで、日本社会の内部そのものも国際社会に対応できるソフト・ハードの改革が急務である。また、国際社会のなかで大きな地位を占めるに至った日本が、その持てる力で世界に向けて貢献していくことが21世紀に世界とともに生きる日本の課題である。民際交流・民際協力が重層的に組立られれば、外向きにも国同士の関係しかない場合に比べ、世界がずっと表情豊かになるし、何よりも世界の平和と発展に貢献できるはずである。

自治体の交流活動もこうした課題を踏まえ、新しい展開が求められている。その際、Local Governmentとしての「自治体外交」と地域社会レベルで世界に開いていく「市民外交」のそれぞれの役割と責任及び協力関係のあり方が今後ますます重要になってくると考えているところである。

「NGOフォーラム」打ち明けばなし

神奈川県職員 大竹 准一

さくらめーるってなんですか

「さっきから話にでている“さくらめーる”とか“JCB”って、いったい何なんですか？」

1987年初夏、翌年3月に神奈川県の小田原で開催された「アジア市民フォーラム」へ向けての実行委員会でのやりとりである。ちなみに、“さくらめーる”とは、シャプラニール、“JCB”とはJVCのこと。NGOペースで話が進んでいる中で、神奈川の地域グループ（おばさんパワーといったらおこられるかな？）からの強烈な一撃である。

それに先立つ1986年の年の瀬も押し迫った12月29日、JVCの東京オフィスで「アジア市民フォーラム」構想がスタートした。市民による海外協力を積極的に支援しようとする神奈川県と、NGO側からの要請がタイムリーに結びついてのスタートだった。当初のメンバーはJVC、シャプラニール、そして神奈川県とその職員。以来15カ月に渡る「フォーラム」への格闘が始まる。

最初の構想であった“NGOフォーラム”から広範な市民（これから何かやってみようと思っている人たちもふくめて）を巻き込んで、海外協力の現状と将来を語り、出会う“市民フォーラム”にしていくため、NGOだけでなく神奈川の地域の人たちにも入ってもらおうと準備段階から、地域でじっくりと暮らしの問題等に関わっている人たち（神奈川の現状として主婦パワーが大きい）が参加した。その中で飛び出したのが冒頭の一言である。今、思い起すと「アジア市民フォーラム」の“はじめのいっぽ”が、ここから始まったといえる。

裏方として15カ月「フォーラム」に関わらせてもらった、神奈川の市民であり、県職員である僕なりの視点で「フォーラム」を担ったいろいろな人たちについて書いてみようと思ったとき、真っ先に思い浮かんだのが、真鶴町という神奈川県西の端にある小さな町で、自分たちの暮らしの見直しから世界との関わりを考え、地道な実践を続けている元気な女性たちだった。

共通の理解のための長い作業

今、手元の記録を見てみると、「フォーラム」の

準備期間15カ月の間に実行委員会が8回、事務局会議が約50回以上（ほぼ週一回のペース）を数える。その間、僕たちのやろうとしている「フォーラム」がどういうものなのか、どういう人たちに働きかけるのか、数多くある切り口のうちどれを選ぶのか等について繰り返し繰り返し、それこそ飽きるほど議論が繰り返された。

何度も何度も黒板に日本とアジアの絵が描いては消され、この「フォーラム」が何をめざすのかが議論された。それは、とても迂遠なようだったがそれぞれのバックグラウンドを持つ個人として集まったスタッフが、共通の理解を持つために必要なものだった。その中で、ともすればNGO＝専門家ベースで進みがちな議論を、“市民”、“地域”の視点に引き戻してくれたのは、彼ら地域からの参加者であったように思う。そして、これらの共同作業を通じて、海外協力の専門家＝遠い存在と感じがちだったNGOのメンバーがやはり迷い、悩み、立ち止まる一人の市民として、お互いの顔が見え始めてきたことが、僕も含めた神奈川のメンバーにとっては大きな成果だったのではないだろうか。

“プロの公務員”を巻きこむ

もうひとつの担い手、自治体について触れたい。

この「フォーラム」の大きな特長の一つは、海外協力に関するこの手の企画に、自治体＝行政が積極的に関わったということにある。

市民サイドには、ともすれば行政のひも付きを嫌がる声も聞くが、全国的に自治体の国際交流、海外協力盛なりし今、行政主導での毒にも薬にもならぬ啓発事業や行政がお膳立てを整えた上での形だけの市民参加事業といったように必ずしも市民ニーズに合わない事業、流行に乗った海外協力等に多くの予算を使うより、現場や経験の蓄積のあるNGO・市民グループと一緒に進めていった方がどれだけ良い仕事ができるか。そんな意味でも、市民サイドは行政を見捨てる前に、ぜひとも行政に関わり、変えていってほしいと、一行政マンとして切に思う。

行政のひも付きを嫌がる大きな理由の一つが、金を出す口も出す、ということであるが、今回の「フ

フォーラム」で特筆すべきは、実行母体である市民に100パーセント仕せたきり、内容についてはもちろん、進行状況等についても、一切行政が口を出さなかったことである。

先に書いたように、延々と議論を繰り返し、目に見える最初のペーパーである「フォーラム」の開催要綱が出来上がったのが、開催3カ月前の12月。その間、行政側の担当者は、上からの「準備は進んでいるのか」という声に「大丈夫です」と答え続けてくれたという。今だから言えるが、事務局メンバー誰一人として、「フォーラム」当日になるまで「やれる」と確信できる者はいなかったのだから恐ろしい。

「フォーラム」に参加した一人の県職員が分科会でこんなことを言っている。「私はプロの地方公務員を目指している。プロの地方公務員というのは地域（市民）を見て仕事をする。インチキな公務員というのは役所の内部を見て仕事をする」我が担当のプロの公務員の、市民に対する全面的な信頼は、逆に市民の行政に対する強い信頼につながる。役所の内部にいるものとして、このようなプロの公務員が、特に若い世代で、だんだん増えてきているのではないかという感触を持っている。

もうひとつ、「フォーラム」と行政の繋がりの中で忘れられないのが、5時過ぎになると事務局に飛んできて、ボランティアとして夜遅くまで議論に、作業に参加した、若い公務員たちである。

「フォーラム」の実務の上で、彼らの果たした役割は大きい。ある人は、資料調達に走り回り、おかげで会場の事務局の部屋は、何でもでてくる魔法の部屋となった。また、ある人は最初から最後まで財務を担い続けた。「フォーラム」終了直後の、予想もしなかったアクシデントに、そういうことをも予定に入れて立てていた財務計画に従い、こともなげに対応した彼女に、我々は舌を巻いた。

彼らは、これまで仕事で培った実務能力を十分に発揮するとともに、市民と行政を結びつける上で大きな役割を果たしたといえるだろう。また、この「フォーラム」をきっかけに、海外協力活動に参加した職員もいる。

市民サイドから行政との繋がり进行を考えると、このような公務員をいかに巻き込んでいくかがひとつのキーポイントになるように思う。ただ、彼らもそれぞれの職場で周囲から理解されているとは限らない。どちらかといえば、「浮いている」場合が多い

のが現状のようだ。実績を重んじる役所社会、市民サイドとしても、プロの公務員氏の信頼にしっかり応えていくことが、今後の仕事を進めやすくするために必要であろう。

フォーラムが残したもの

今回の「フォーラム」を考えると、NGOの豊富な現場経験、広範なネットワーク・ノウハウの蓄積、地域グループの「生活者」としての視点、明るさ、そして公務員の実務的頑張り等々、それぞれがお互いの役割をしっかり担いながら支えていったといえる。だからといって、今回の「フォーラム」が百点満点だったなどと言う気は毛頭ない。海外ゲストの参加のあり方、地域グループの掘り起こし不足、企画の内容等について反省点は山ほど出てきた。今回は「ビギナーズ・ラック」であって、次回はこうはいかない、という声もある。

しかし、それらを差し引いても、あの会場を埋めた500人の熱気は15カ月間苦しんだ僕たちにとって計算をはるかに超えた、十分すぎる報酬だった。その熱気は、おそらく僕たちが15カ月にわたって模索したと同じく、参加者一人一人がそれぞれのバックグラウンドを超えた“市民”として共有できる場、顔の見える関係を一緒につくっていかうという熱意だったのではないかと思う。願わくば、何年かのちには会場での深夜の準備作業にアジアからの参加者が一緒に参加しているようなフォーラムになってほしいと思う。

神奈川で500人の参加者が飛ばした「アジア市民フォーラム」の種子は、県内のあちこちで少しずつ根付きつつある。準備期間中事務局の置かれた、横浜にある県国際交流協会交流コーナ「KIS」は、いろいろな人と情報が入り出すネットワークの場として機能しはじめている。また、「フォーラム」の分科会をきっかけに同じテーマで活動するいくつかの団体のネットワークも生まれた。県の西の端からは、女性の集まりでNGOの現地スタッフの奥さんを交えての学習会が開かれた、なんていう報告も入ってくる。

そして、その種子は1989年11月、関西にまた根をおろそうとしている。

繰り返し繰り返し、様々な人を巻き込みながらこのような“場”を作っていくことこそが、日本における市民による海外協力を根太くしていく最短の道ではないかと思う。関西での取り組みに期待したい。

KISを知っていますか？

京浜東北線関内駅から歩いて15分、産業貿易センタービル9階の神奈川県国際交流協会の一角の、KIS (Kanagawa Information station)のそのまた一角にJVC神奈川が机を置かせてもらっている。同じ階の交流協会や談話室からは横浜港が一望に臨め、いかにもオフィスという感じなのに対し、窓がなく文房具類や資料が雑然と置かれたKISのふんいきはNGOそのものである。

昨年3月に小田原で開かれたNGOフォーラムではKISが大活躍し、準備のために集まったNGOの拠点となった。KISは神奈川県という自治体の一部であるのに、自由さと気楽さがあるのはこの主、荻村哲朗さんに依るところが大きい。

荻村さんは実をいうと法律の専門家である。沖縄研究として波照間島に行った時、民法、刑法など知っていても生活の役に立たないことを知った。大工や漁師なら生活できるのに。東京に帰ってから方向転換を計り、'84年から'87年まで川崎市の平和資料コーナーで働いた。'86年の国際平和年は文



荻村哲朗さん

字どおり活発な動きを見せたが、その盛り上がりをもどくようにつないでいこうかと思っていたところ神奈川県国際交流協会に誘われた。

〔荻村〕

KISのことを説明するのは難しいけれど、KISとは産貿センターの一室のことじゃないんです。役所は箱ばかり作りたがるけれどKISは箱じゃない。ソフトだけといってもいい。アメーバのようにどんどん増殖していくんです。ここでは多い日には50~60人の人の出入りがあります。NGO関係の資料を見に来たり、作業をしたり。何らかの形で市民運動に参加している人が多いです。

これまで僕は情報を中心に考え

ていました。情報さえあればアクションをおこせると。でも『ぴあ』はありますが、みんなが映画を見るわけではないでしょう。見た気分になるだけで。「ねえ、ねえ行こうよ」という人のつながりが大切だと思ったのです。産貿センターは横浜でも一等地にあるので名刺を見せるとホテルといわれますが、市民の集まる場所としては駅前なんかの方がいいんですけど。

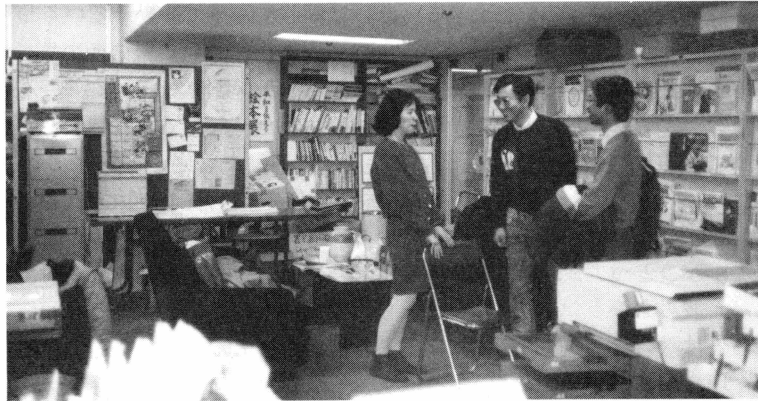
昨年の4月からは週に4日太田康博さんが手伝いに来るようになった。非常勤職員として現在はKISの機関誌の編集をしている。もうそろそろ第一号が出るはずである。

現在太田さんは大学の4年生で社会福祉を学んでいる。身体の弱い人への気の配り方はなかなかのものだと荻村さんは評価している。〔太田〕

KISの職員の公募があったので応募してみたら通りました。将来のことは漠然としか考えていないけれどとりあえず第三世界に行ってみたいです。アジア、それもインドが好きです。

今の学生ですか。この建物にあるヨーク（横浜市海外交流協会）に来る人もいるけど、KISにまでは来ないかなあ。でも青年海外協力隊に興味を持っている人は多いし、第三世界に関心のある人はかなりいると思いますよ。

KISに人が集まりだすのは午後、それも仕事帰りの人たちが立ち寄



KISはNGOのふんいきがある



太田康博さん

る夕方頃から混みだす。しかし、この日は時間が早かったため、KISで作業をしているのは1人だけだった。

〔椎野〕

10月の初めから週に1回KISのボランティアをしています。主人が県の職員をしておりますので、その勤めもあって社会参加のつもりで来ました。ここにはいろいろな人が集まりますし、来るたびに何か発見があり視野が広がったような気がします。

まだまだ「ボランティア」に対し世間では異和感がありますね。チャリティーウォークの説明も難しいし、まわりの人にこういう活動を伝えるのは大変です。

国内活動に現場の感覚を持ちこんでもなかなか通用しないようだ。そのところを荻村さんは次のように指摘する。

〔荻村〕

現場のスピードを国内に持ちこんでも国内では受け入れられません。少しでも関心を持っている人に少しずつゆっくりゆっくり話していかなければ。家庭の主婦に現場に行けといっても無理です。海外に現場のあるJVCのようなNGOは、そういう地域で活動している人々と海外をつなぐ役目があるんじゃないですか。地域の人々とじっくり話しこんでいくのは時間も

NGOと地域とのかかわり

吉田新一郎

日本のNGOでまず感じるのは地域性のなさですね。そこに住んでいる人が何を考えているのか、知ろうとする努力が足りないと思います。一長一石にNGO活動が人々に広がることはありません。やはり第三世界に行ったことのあるような人が中心になって市民を巻きこみ、そして自治体を動かす。ドイツのブレーメン市は自治体がNGO活動に理解があることで有名ですが、市民たちが動き出し、行政がかかわるまでに10年もかかりました。今では議会とNGOが新しい援助政策を作り出しています。

日本の場合市民というものが欧米とは少し違いますし、ブレーメンのやり方をそのままとり入れることはできません。でもNGOとしては行政が何を考えているのか知る必要がありますね。行政は基本的にイベント好きです。NGO側が企画し、それを持って行くのです。オランダのNOVIBは自分たちの会員を活性化するための職員を置いています。“違う言葉を話す人”にもわかるような言葉で話し、接点をみつけなければ。人と人との蓄積が行政を動かすのだと思います。(談)



山口誠史さん

かかるし、めんどくさいかもしれません。でも、JVCならできるし、JVCの実績は必ず地域で評価されるはずです。

JVCなどでもよく「同情じゃない。同じ立場に立って行動してるんだ」と言うでしょ。でもこういう活動って同情から始まることが多い。だから「かわいそう」と思っている人たちもつっぱねないでほしいですね。そこから後続者が育つはずですよ。

JVCへの苦言を聞いたところでこれまでJVC神奈川をしょってき

た山口さんの意見を聞いてみよう。

〔山口〕

今までを振り返ると孤軍奮闘していたという感じがします。JVC神奈川の仕事と定住難民プロジェクトをかかえこんで、プロポーザルも僕が作り、ほかの人には事後承諾でしたから。JVCの活動者の報告会や定住難民のミーティングを企画しても人が集まらなくて徒労感を感じたこともありました。多分そんなところに原因があったんだと思います。

これからは、定住問題に関心のある人を中心により多くの人とこの問題を共有していきたいと考えています。カンブチアやラオスの人たちにもかかわってもらいたいし。4月からは小野豪大さんが定住難民プロジェクトのコーディネーターとして専念するので、もっとこまめにボランティアとのミーティングもできるのではないかと期待しています。

KIS in 横浜 in 神奈川 in 世界

荻村 哲朗

早いものでKISがオープンして既に1年半が過ぎようとしています。KISは（財）神奈川県国際交流協会内に設置された国際的な市民運動のための情報ステーションです。ここにはNGOの機関誌を中心に情報が集められ、100m²余りの部屋は活動のための作業の場として市民に開放されています。ここを中心に、あるいはこことつながりながら様々な試みがなされました。しかし、こうした多くの人々との「つながり」がKISの財産であることは間違いないことなのです。なによりもまず、活発で魅力に溢れた人々がここを訪れるのです。ひっきりなしにかかってくる電話攻勢に悩まされて、安請合いの性分を恨んだことは数えきれませんが、楽しい毎日であることには間違いありません。

KISは決して便利な施設ではありません。神奈川県全域からみて横浜が決して集まりやすい場所ではないことに加え、KISは最寄りの関内駅から15分以上歩かなくてはなりません。さらに、ここには窓がないのです。空調も悪いし、タイル式のジュウタンはあちらこちらに隙間を覗かせています。元気のいいKISの来室者たちは、さらにジュウタンの隙間を蹴り上げ亀裂を広げてしまいます。「学校の部室をイメージし、誰でも気軽に入れるようなアットホームな雰囲気づくりを」は弁解で、実は整理整頓がKISのスピードに間に合わないのです。しかし、そのことで椰揄されたことは数えるほどです。逆に、「ここに来ると安心する」と話してくれた人が大勢います。なにが幸いするか分かりません。

KISができるまで

（財）神奈川県国際交流協会内にKISが開設されるに至った経緯は大切にしたいと思います。すこし書いてみましょう。

KISのアイデアは1986年、国連が提唱した「国際平和年」に呼応して、神奈川県で展開されたさまざまな事業の中から生まれました。この年、神奈川県では「国際平和年推進協議会」が組織され、多くの市民に参加を呼び掛けながらさまざまな講演会、映

画会、ワークショップなどが活発に展開されました。この一年の特徴は、これまでお互いに関わりのなかった草の根の市民グループたちが「平和」を考え、行動し、伝えていくための共同作業を地域レベルで取り組んだことにあります。もちろん、ここで言う「平和」は、戦争のない状態だけを意味するものではなく、私たちが暮らすこの地球が抱える様々な課題を解決していく試みすべてを指して使われた言葉です。また、行政が黒子に徹しながら市民グループの企画に必要なサポートを行ったことも評価されると思います。企画に参加したある県職員は、市民参加方式による手際の悪さを差し引いても、それによって出来上がる事業の内容は自分たちにはない斬新さがあると感想を述べていました。

こうした一連の動きを実現させたのは、実は小さな部屋の存在でした。現在KISがある交流会内の旧展示室にこの推進協議会が置かれていたのです。終電間近まで、企画会議やイベントの準備で人の往来が途絶えません。用が無いのに人に会いたくて訪れる人も、コーヒーが目当ての人も、誰でもが自由に集まれる雰囲気がそこにはあったのです。なかでも、ひとときわ高く笑い声を響かせていた県職員のWさんの存在が要であったことは見逃せません。

さて、平和年も終わりに近づき、残務整理がささやかだされる頃、同時に1年間の活発な流れを今後につけていく必要性が言われ始めました。こうして出された「提言/平和を求めて（国際平和年を明日につなげるために）」には、さまざまな分野で行われている「平和な国際社会の創造」の活動が、共通する課題について情報を交換し、学び合い、横のつながりを作っていくための作業の場としての「市民活動情報ステーション」構想が加わりました。これは、平和年に参加したボランティアたちからの行政に対するラブコールだったのです。

この提言が芽ぶき、KIS開設へと育っていったのです。翌年1987年8月、所も同じ（財）神奈川県国際交流協会の展示室を模様替えし、慌ただしくKISがオープンしたのです。

現在のKISはいくつかの恒例事業を抱えながら、少しずつネットワークを作りつつあります。急速な組織化を目的とするのではなく、地域レベルの地道な共同作業を通して培われる信頼関係を育てることから始め、その可能性を海を越えて広げられたらと考えています。

もうひとつの横浜

もともと私にとって横浜は馴染み深い場所です。東京で育ちましたが、幼いころから両親に連れられて横浜の中華街でよく食事をしましたし、高校時代のデートコースは、渋谷から東横線で横浜に行き、中華街と港の見える丘公園と相場が決まっていました。ですから、いまだに海見える協会オフィスで仕事をしていると休日気分が抜け切れないようです。ここだけの話ですが、就職の一番の動機は協会オフィスから見える横浜港の夕焼けでした。

しかし、こうした華やかな国際都市横浜のイメージとは裏腹に、もう一つの横浜があります。元町最寄りの駅である石川町から、海側の華やかさとは反対の方向に歩くこと5分で「寿町」に入ります。戦後、日本の復興、経済大国への急成長を底辺で支えてきた日雇い労働者が生活し、ドヤと呼ばれる簡易宿舎が軒を連ねる街です。色彩の乏しい道端のあちらこちらに焚火のあとが目をはきます。横浜市の職員でもある野本三吉さんの著書で寿町をご存じの方も多いと思います。ここ数年はフィリピン人をはじめアジアからの出稼ぎ労働者が多く流れ込んでいます。その意味では、寿町は横浜で最も「国際化」した街かもしれません。

昨年夏、バングラデシュから、シャブラニールの識字プロジェクト担当のマフーズさんがKISで講演をしてくださることになりました。前日に横浜入りしたマフーズさんは私の部屋に泊まることになりました。山下公園を通り家へ向かう途中、公園の片隅で雨を避けながら段ボールの上で寝ている人がいます。「なぜ彼はここで寝ているのか？」ときかれた私は、寿町のこと、日本の近代化に伴う底辺労働者の都市流入形態（単身流入）などを説明したと思います。ところが、マフーズさんは私の言葉を遮って、「そうではなくて、私がきいているのは『なぜ誰もこの老人に声をかけないのか』ということだ』と言います。言葉を失った私に、「ぼくの村へ来てごらんよ。道ばたに人が倒れていれば自分の家に連れて行って食事を与えるし、仮に貧しくて食事や寝

場所を提供できないとしても、声はかけるよ」と言いました。「私たちが目指す近代化は日本のそれとは異なる」と多くのアジアの人から言われてきています。

自分たちの社会変革に参加している世界中の多くの人々と学び合いながら、地球規模での共同作業が必要とされていると感じるこの頃です。

そして神奈川、人と人

KISに来る前は、川崎で仕事をしていました。川崎市が開設した『川崎平和資料コーナー』で、平和、人権、環境、開発などの活動を行う海外NGOの機関誌収集を中心に内外の市民レベルの情報収集・発信に携わっていました。このプロジェクトの話が持ち込まれたとき、参加を決めた一番の理由は「東京ではなく、川崎」ということでした。東京はスピードのある街です。ほとんどの情報は東京を中心に受信/発信されていきます。ある意味では、情報管理が東京の基準で行われてしまう危険性が高いということです。ですから、情報の分散を目指して、川崎にもキー・ステーションをつくりたかったのです。この考えはKIS構想の基礎にもなっています。

しかし、川崎の試みは残念ながら成功したとはいえません。「情報が広く流通すれば、アクションが生まれる」と当初は考えていましたが、アクションを生むには異なった要因が必要だということが分かってきました。例えば、雑誌などで情報を充分に手にいれた人が必ず映画館に行くとは限らないということと同じです。むしろ人と人との出会い、つながりの中から、情報の交換、活動への参加が生み出されていくようです。KISがことさらに「人」にこだわるのもそのためです。

さて、KISも次のステップを目指し始めました。情報の充実、作業の場としての環境整備など機能の充実を計りながら、地域コーディネーターの役割を果していきたいと考えています。と同時に、誰もが気軽に立ち寄れる「場」にもしていききたいということには変わりありません。

KIS：神奈川県横浜市中区山下町2産貿ビル9F

(財) 神奈川県国際交流協会内

TEL 045-671-7012 (月曜休み)

難民の自立を 防げるもの

ザンビア難民キャンプにて

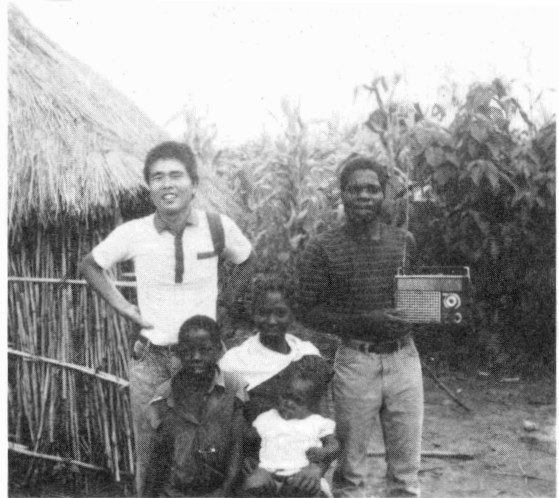
大満邦彦

メヘバ・キャンプの朝

どこかで朝を告げるニワトリの鳴き声がする。まだ外は薄暗いけれど、小学校へ向う子供たちや、市場へ売りに行く野菜のかごを頭に載せたおばさんたちが道を急いでいる。息が白くなるほど寒い。7月はザンビアで一番寒い時期で、稀に薄氷さえ張るといふ。朝日が出て来ると、市場の囲りは急に活気が出て来る。1年中で一番野菜の少ない時期なので、買い物も競争だ。キャベツやトマト、青菜やとうがらし、ピーナツなどが、あっという間に売れていく。貴重な蛋白源として、湖に住むなまずや小魚、そして、昆虫の幼虫等もよく売れる。さとうきびは、子供たちの大好きなおやつだ。70キロ離れた町まで出かける大型トラックの荷台には、すき間も無いぐらいぎっしりと買い出しの人々が乗っている。病院の前にも人々が集まり始めた。

ここはアフリカ中南部の内陸国ザンビア。その北西部、ザイル国境に近い灌木の土地を切り開いてできたメヘバ難民キャンプの、ある朝の光景である。難民キャンプと言っても、鉄条網に囲まれたインドシナ難民キャンプとは大きく違う。とにかく広い。なにしろ淡路島ほどの面積が難民居住地域となっているのだから。灌木を切り開いて計画的に作られているので中央通りを中心に区画が整然としている。しかし、舗装道路は1つもなく、雨期には道が悪くなって自動車も使えなくなる。また、あちこちの林の中には、鹿やインパラ、うさぎや猿も生息している。

1988年現在、ここに約1万5千人の難民が生活していた。アンゴラやザイル、ナミビアといった周辺諸国から、生命の危険を感じて逃げ出して来た人々である。この人たちが国連の難民認定を受けて、一時滞在キャンプから、このメヘバ・キャンプへ連れて来られると、2年間はテントで生活しながら、衣食住や日用必需品の配給が受けられる。そして、



ジョンさんと私

この2年間に、各家族に与えられた5ヘクタールの土地を開墾し、家を建て、水源を確保して、配給無しで、自活していけるようにしなければならない。だから、道沿いに民家やとうもろこし畑だけを見ると、普通のザンビアの農村より家が多少寄り集まっているぐらゐの印象で、いわゆる難民キャンプのイメージとは、ちょっと違う。

難民たちの過去

1960年代半ばから、ポルトガル領アンゴラでは独立闘争が起こり、隣のザンビアへの難民流出は始まった。これに対しザンビア政府は、アンゴラ難民を特定の地域で監視下に入れるために、国連や協会の援助の下、1971年にこの地に難民キャンプを設置した。その後、アンゴラは独立して東西両陣営の代理戦争の舞台となり、難民の数は倍増した。また、少数派だが、1977～78年に、ザイルの鉱物資源の宝庫シャバ州で起きた分離独立動乱の失敗によりザンビアへ逃げてきたザイル難民や、南アフリカの不法統治に抵抗したために追われて来たナミビア難民もここで同じように暮らしている。

アンゴラ難民のジョンさんはこう語ってくれた。「アンゴラでは結婚して子供が一人生まれたばかりの頃だった。俺たちの部族は、首都で政権を握っている部族とは昔から対立関係にあったため、反政府ゲリラの一員として駆り出され、ザンビアとの国境地帯に配属された。ある時、政府軍の飛行機によるすげい攻撃があつて、命からがらザンビア側まで逃げてきた。アンゴラの反政府勢力に関わらない前提で難民と認定され、ここに住むようになった。赤十字を通して、国の家族と連絡をとろうとしたが、内戦の激化により、その消息は不明だった。やがて、ここで現在の妻と結婚し、二人の子供も生まれた。アンゴラが平和な国によみがえって、安心して帰れるようになったら、なんとかして家族を一人一人見

つけ出したい。多分、家族の方も俺は死んでしまったものとあきらめ、葬式もしてるんじゃないかな。生きて俺が帰って来たら、びっくりするだろうなあ。今はさしあたって生活を豊かにしていくために、お金を貯めてトラクターを買って、うんと収穫をあげたいなあ」。

ジョンさんより一回り若いルシアーノは、「独立直後の内戦が激化してきた頃、俺は出身地の南部の町から、北部の首都ルアンダの工場へ出稼ぎに来ていた。いつからか、自分のような南部出身者への迫害が始まり、身の危険を感じて、他の南部出身者と共に、ある晩船で逃げ出したんだ。途中からは陸に上がったが、戦局悪化で自分の町へは行かれないとわかり、とにかく安全な場所を探して、南へ南へとナミビアまで逃げた。途中でキューバ兵が幼児を虐殺するのを見た。その時のショックは、今も忘れず脳裏に焼きついているよ。よく無事で、ここにこうしていられるものだ。早く安心して国に帰りたいよ」と言っていた。

今はみんな平静と普通の農村共同体のように暮らしているが、少し立ち入っ話をすると、この2人の場合のような必死の逃避行があったわけで、また、多くの同胞の死を真近に体験した者も多いのだ。

援助がもたらしたもの

さて、この難民キャンプで暮らす人々の生活状況や問題点であるが、これをカトリック教会の側で、真剣に考えている、ザイール難民のリチャードに聞いてみよう。「確かにここは、ザンビア最大の難民キャンプとして、学校や病院、市場、交通機関もそろい、普通のザンビアの農村よりは格段恵まれている。少なくとも食べていけない人はいないわけだから。しかし、海外の団体や、政府の人間がここにやって来たことにより、人々がすっかり高度技術文明に巻き込まれてしまった。必要が無くても、大人はラジカセや電卓、時計等を買うためにせせせとお金を節約して、金もうけになる野菜ばかり作っているのが現状だ。結局、子供の栄養が一番ないがしろにされてきたわけだ。

それと、いろいろな所から逃げて来た難民が一緒に住んでいるので、まとまってみんなで助けあうという気持があまり無いね。みんな努力さえすれば、自分の家族が食べる分には不自由しないわけだから、他の家のことにはとても無関心だ。どこかの家で、

働き手の主人が死んでも、誰も残った家族の面倒を見てくれない。結局、教会に頼るしかないわけだ。まあ、みんな、ここを一時滞在の場所のように考えているから、この難民キャンプがあと10年先にはどうなってるかなんて、考えられないわけだ」。

なるほど、ここは一見普通の農村のようでありながら、こうした特殊な状況があったのだ。農村社会でありながら、大都市のように無関心さの残っている印象がある。ただ、このような難民同士の無関心さの背景には、受け入れ国ザンビアの国情も大きく関係している。アフリカの他の多くの国と同様、ザンビアでも、複数の部族の共存は重要な問題で、強力な中央集権にして、政府が地方までいつも目を光らせている。だから、外国から逃げて来た人間が団結して、生活を向上させていく動きなどは、到底認め難いわけで、難民に与えられているのは結局、最低限の人権のみなのだ。そのため、人間一人一人の個性が育たない。みんなと同じように無難に生きていけさえすればいいという保守的な考え方が大変強くなる。アフリカでの難民への援助の場合、受け入れ国の事情によっては、理想的な難民自立ばかりを掲げることは、現実的ではないだろう。

1987年にはこの難民キャンプ内に、日本政府の無償援助として総工費7億円の中学校が完成した。現地の人々の生活と見事なまでにアンバランスでデラックスな学校で、まさに経済大国日本の力、アフリカの辺境にまで及ぶといった感じだ。これをきっかけに、外国人は自分たちのために何でもしてくれるという風潮が広まってきた。例えば、日本の学生との文通を学生たちに勧めてみると、日本の服や靴が欲しいとだけ書いて終りという、非常識な手紙ばかり書いてきた。やはりアフリカのドライな相互扶助社会と、日本の義理人情社会は一緒にしてはいけないと思いながらも、やりきれない気持ちでいっぱいだった。経済格差があまり大き過ぎると、人と人との健全な友情関係さえ成り立たないのだろうか。今では、援助というものが、人間にとって幸いと災いを同時に生み出す両刃の剣に思えてきた。

それでも、最近の明るい話題として、1989年のキューバ兵5万人のアンゴラ撤退と、ナミビアの独立が決定があった。これで直ちに難民が帰国できるようにならないだろうが、大きな進展には間違いはないと思う。問題の真の解決は、難民が難民でなくなること以外には無いのだ。

難民にとってのサクセスとは

五十嵐 裕昌

「日本の政治はどうなんだ。日本に共産主義者はいるのか」

「日本は平和で自由な国だと思うが、なぜその日本に軍隊があるんだ」

「今の日本の首相は右よりか左よりか」……等々。

日頃自分の置かれている状況、そして祖国日本の現状を真剣に考えた事のない僕にとってどれもこれも難しい質問でした。そして……「日本はいつでも東南アジアを踏みにじてきた。大戦中は我々を植民地の奴隷のように扱い、戦争に負けると原爆を落とした犯罪者アメリカの手先となって、アメリカが右を向けば日本も右、アメリカが前進なら日本も前進、そしてベトナム戦争中はオレたちが死んでいくのを尻目に企業を進出させ、そして今、その犠牲の上に成長した日本がオレたちに何もしてくれない。日本の政府は日本定住のための使節団を送ってこない。日本語の教師もこない。なぜだ、お前たちはオレたちが嫌いなのか」……と。

この問いかけに僕は答えが見つかりませんでした。いかに日本人がボランティアとして海外協力を続けようとも、日本国は常にアメリカの手先として東南アジアを踏みにじる悪役であるのです。

今回の僕の目的は難民救援ではなく、キャンプ視察でもなく、英語の勉強であり、難民である彼ら1人のクラスメートとしてルームメイトとして滞在したのでした。最後にある日の授業風景を紹介します。

その日の授業（もちろん英語による授業です）のトピックスは“サクセス（成功）とは何か”でした。

あるおじさんいわく、「私は今までサクセスを得た事がないです。これまでは後悔と苦しみ的人生でした。これからもうでしょう。ただ1つサクセスと呼べるものがあるとしたら、それは、いつの日かまた家族がともに同じ屋根の下に暮らし、苦しみを分かち合え、これまでのことをなぐさめあえる生活を築くこと、それが私にとってのサクセスです」と。

僕の母親のようなおばさんは言います。「私の息子をオーストラリアの大学に行かせること。私は両親も夫も失ない頼りは息子だけ。あの子さえ大学に入って職に就いてくればこれほど幸せはない」

すると、「そんな事できるはずがない」と即座に

否定されてしまいました。

「この世に人間がいる限り、戦争は起こり続け、難民は出続ける。オレたちは誰も傷つける気はなかったし、何も奪う気もなかった。ただ家族といっしょにひっそりと暮らしたかった。しかし、それさえもできない世の中なんだ。この世の中であって世界平和を望むなんて金持ちのうぬぼれだよ。オレたちはこの先、どこに行っても何をしても戦いさ。その戦いの中で年老いて死んでいく。それが現実だ。サクセスなんてあるわけない。

オレたちはここに來たくて來たんじゃない。アメリカに行きたくて行くんじゃない。これしか生きる道がない、選択の余地はないのさ。お前はここに來たければ簡単に來れる。帰る家も国もある。行きたければ大学にも行けるし、アメリカにも行ける。成りたければ医者にも教師にもなれる。オレたちはここで英語の勉強をして、たとえアメリカに行けても、行く末は道路掃除夫か皿洗いぐらいいさ。悪けりゃ今度はアメリカで難民に逆戻りさ。

お前にこの違いが分かるか。たしかにこの教室の中ではお前もオレたちもただの生徒さ。でもそこには大きな違いがある。この苦しみ、悲しみが日本人のお前に分かるのか……と。その激しい主張に僕は何も答えられなかったのですが、彼は最後に言いました。

「でもそんな日本人でもここに来てオレたちの状況を理解しようとしている。オレたちとともに考えようとしている。もしかしたら何かが変わるのかもしれない。もしかしたら何かが動きだしたのかもしれない。これが何かに向かう第一歩になるかもしれない。よし、そう信じよう。そう信じてみることにしよう」……と。

僕は彼が最後に言った言葉を信じようと思います。信じることから前進が始まるという彼の口ぐせを信じようと思います。そしていつかまた、今度はお互いに違いのない同じステージで、世界について話し合える日が來ると思います。その日のための第一歩を今回の訪問で踏み出したような気がするのです。

みんなで面白いことやしません？！

JVC国内運動へのご招待

活動者会員 竹内俊之

昨年JVC会員総会で私は参加者一人ひとりに「JVCの国内運動に知恵を借してください」というピラを渡しました。それから数カ月たちましたが、その間、どのように「運動」が始まり、また続いているのかここで読者の皆さんに簡単に中間報告をしたいと思います。

総会後のとある日曜日の夜、「国内運動井戸端会」なる珍妙な名称をでっちあげ、湯島のJVC事務所に集まったのは10人足らずの会員、活動者OB、ボランティアなど。その席では、市民運動としてJVCの活動を継続していくためには、ここに集った私たちは何をすればいいのかというようなことが、話し合われました。JVCの活動をきっかけにして第三世界の問題にソデを触れてしまった個人が、今度は自分で周りの人々に働きかけるような自発的、自律的な運動を創り上げること、そして私たちの活動はそのタネを撒く事だ！ そんなことがボンヤリと、しかし重い課題として残ったのでした。

さて、そのようなスウコウな理念のもとに具体的にどのように取組んで行ったのか。思いつくまま振り返ってみます。

「ロック・フォー・ザ・レインフォレスト」地球の友、熱帯林行動ネットワーク（JATAN）共催の「チャリティ」パーティに参加。JVCは飲食物の手配販売を一手に引き受け、この時のガンバリが、両団体とのより緊密な関係に発展しました。この号がみなさんのお手もとに渡るころには「ロック・フォー・ザ・レインフォレスト Part 2」が三者共催の形で開かれて（1/21予定）と思います。

「スコティッシュ・ナイト・イン専修寺」東京は品川区五反田にある一行山専修寺の境内にある幼稚園の講堂をお借りして、園児用の小さな椅子をならべました。スコットランド・フォークソングとフォークダンスの「チャリティ」パーティです。ILC英語学校とその先生たちの協力を受け、ガイジンさんたくさん来てくれました。オモチャのような小さな椅子に窮屈そうに座っている姿は気の毒ではありましたが、ミョーにユーモラスでした。（ごめんなさい）このパーティはラオスでの活動資金を得るために

企画しました。現在、また違った趣向で企画を練っています。

その他、神奈川県海老名市の「若者の祭典」でのバザーや、東京世田谷区で行われた「雑居まつり」東京/神奈川でのスポンサード・ワークなど不十分ながら取組んできました。

このようなイベントを実施する一方、従来からのマジメ路線？ での活動も続いています。以前からJVCの海外活動者が帰国した際に報告会を開いてくれた、東京文京区のユニークな本屋さん、絵本の店「ピッピー」に集まる市民とJVCの湯島事務所で酒を飲んでた？ 海外協力隊のOBが意気投合して「ごった煮 地球なべ」というグループが生まれました。JVCが取り組む第三世界の問題や援助、環境などより広い関心で学習会を組織しています。またSHAREやJVCの活動者がひんぱんに入出入りしている労働者の街（山谷）でも以前からJVCで「山谷見学会」などを組織している有志によって、現地ですでに活動しているグループと連携を取りながら具体的な取り組みが模索されています。

湯島の東京事務所では、比較的長期に国内、国外でJVCに関わって来たOB（OG）によって、月に2回土曜の午後にJVCのことを知りたいというボランティア、市民に対し説明会（オリエンテーション）を行っています。先日は地域でなにか活動を起こしたいと、わざわざ大阪から来てくれた方もいました。

以上のように、JVCの年間スケジュールにのっているイベントに協力していくのはもちろんですが、事務局スタッフとバカを言い合うなかからヒントを得ておもしろい企画が生まれることが多いみたいです。

これを見て、自分でもなにかやりたくなったアナタ（特に活動者会員として恩恵を受けているヒト）、お互いに横の連絡を取合いながら、「運動」を始めてみませんか？ 「運動」と言ってしまうとシカツメらしく聞えます。まずとにいる人に「うう～ん、どう？」な～んて語りかけること、それがハジマリ。



一点集中から 多極分散へ

嶋田三芳

いまや世界中が、“一点集中”現象に圧倒されそうである。途上国から先進国へ、田舎から都会へ、庶民からエリートへ、弱者から強者へと、社会のいろいろな断面で起きている。

例にもれず、日本社会を反映して、NGOの世界にもその傾向がみられる。JANIC(注1)の調査によると、国際的な開発協力にかかわるNGOで海外に活動現場を持つNGOの約65%が東京圏に集中しているという。また、本部が東京にあり支部を各地にかかえているNGOも多い。JANIC事務局長にその原因をおききしたところ、「首都圏には情報が集まりやすいし、海外に行ったことのある人が多いものですから」と。そのほかにも、いくつかの理由がよく聞かれる。関係する機関やNGO、諸官庁が東京に集中している、人材や資金が集めやすい、交通の便がいいなど。

また、NGO内の組織運営においても、特定の人に責任と権限が集中していく傾向がある。組織内での一点集中である。とりわけ日本のNGOには、その素地がある。経済的かつ社会的に厳しい状況におかれている日本のNGOでは、スタッフに否応なく責任と権限が集中しやすいのである。

JVCの歴史をかえりみても、いくつかの流れのなかに、一点集中の流れがある。辺境の難民キャンプからタイの首都バンコクへ、バンコクから東京23区の片隅へ、そして東京の中心へと組織の核を移してきた。また、JVCの会員の約53%は関東圏に住んでいる方々である。

しかし、この一点集中型の社会とNGOが描く理想的な社会とは同質のものなのだろうか。

そもそもNGOは、より弱き側に立つ組織としてその存在意義がある。先進国から途上国へ、都会から田舎へ、エリートから庶民へ、強者から弱者へと社会の流れを修正することが、とりもなおさず、私たちNGOの活動の基本になっているはずである。であるのなら、その組織形態も、“一点集中”ではなく、“多極分散”になるのが自然であろう。

ICVA(注2)に加盟しているNGOの59団体を調べたところ、首都に本部があるのは50%弱である。また、アメリカ合衆国に本部をおくNGOで難民救済にかかわる著名なNGOは、3極に分散している。ニューヨーク、ワシントン、およびその他の地域に。(注3) 欧米のNGOが大都市に集中していないとは言いきれないが、日本のNGOよりも多極分散的であることは間違いない。

もちろん、実際の運営において日本社会を無視することはできないが、目先のことに囚われた迎合はしなくても良いのではないか。いろいろなNGOがいろいろな地域に生活基盤を持ち、さまざまな活動を独自に展開している。必要があれば、東京などの大都市に連絡事務所くらいはおく。そして、互いに納得する理想の社会を実現するためには、各NGOが連帯関係も結ぶ。私は、そんな多極分散的な世界がNGOにふさわしいと思えてならない。

さらに、NGOの生活基盤と相互関係に限らず、その内部運営においても多極分散型の方が望ましいであろう。運営しやすいようにみえる一点集中型のNGOは、長期的には膠着化をまねきやすく、独善的になりやすい。スタッフの一人ひとりが主体的に参加しているNGO、責任と権限を適切に分散しているNGOは足腰が強く、活気が持続される。

話はとぶが、西アフリカのセネガルにこんな失敗例がある。米国などの先進国が干ばつにあえぐ遊牧民のために数百本の深井戸を掘った。遊牧民は、家畜を連れてその周囲にぞくぞく集まり、そこに定住する者もでた。水の不安から解放されたが、やがて青草は家畜に根こそぎ食べられ、2年ほどで深井戸の周囲は砂漠になってしまった。地球観測衛星ランドサットが宇宙から送ってきた写真には、半径約10kmの砂漠が点々と広がっているという。(注4)

先進国が、都会が、エリートが、強者がリードする一点集中型の社会がたどる未来と、この西アフリカの実例とは異質なものののだろうか。「NGOは一点集中してもその轍は踏まない」と誰が断言できるのだろうか。

私たちは今、大きな歴史的選択に迫られている。

注1. NGO活動推進センターの英語名称の略

注2. International Council of Voluntary Agenciesの略。加盟77のNGOは、2カ国以上で人道援助や開発協力に関わり、活動の多くは世界的に高く評価されている。

注3. 『World Refugee Survey, 1988 In Review』

注4. 石弘之著『蝕まれる森林』を参照。

月の中の人間

私たちが月の中にうさぎの姿を思い浮かべるのは古代インドの言い伝えと関係があるかもしれません。インドの古い仏教説話集『ジャータカ』には、旅の老人に食べ物を献げようと、自らたき火の中にとびこんだうさぎが月に召されているのだという話のっています。一方、「所変われば品変わる」という見本のような民話も実はたくさんあるようです。

(村田広平)

昔、ひとりのかじ屋がいました。かじ屋はいつもぼやいていました。

「おれの仕事はつらいよ。朝から晩まで、鉄をたたいて、やきを入れて、ずっと火のそばにいなけりゃならんのだから。山の上の石になりたいなあ。いつもそよそよと風がふいていて、大木が木かげをつくってくれるし」

そのころは、なんでも願いをかなえてくれる神通力をもつ人がいました。その神通力をもつ人がそれを聞いていました。

「なんじは石になれ」

すると、そのことばが終わるやいなや、かじ屋は山上の石になりました。

その後、しばらくして、彫刻師が通りかかり、彫刻するのにふさわしいよい石をさがしていました。彫刻師はかじ屋が変身してしまった石をみつけて気に入りました。さっそく切り出そうとしました。

石は非鳴をあげていました。もう石になるのはごめんだ。彫刻師のほうがいいよ」

神通力をもった人はおかしくなって、命じました。

「なんじは彫刻師になあれ」

すると、石は彫刻師になりました。彫刻師は、あちこち、彫刻にむく石をさがして歩きまわりました。歩きつかれて、足は皮がやぶれて、血が流れ、はれあがってしまいました。それでたまらず、またつぶやきました。

「もう彫刻師はいやだ。明るくかがやく太陽になりたいなあ」

そこで神通力をもつ人は命じました。

「太陽になあれ」

男は、今度は太陽になりました。

しかし、太陽は、かじ屋よりも暑いのです。まして、石よりも暑いし、しかも、彫刻師よりも暑くて、やっかいなのを知りました。そこでまたつぶやきました。

「もう太陽はいやだ。お月さまがいいよ。とてもすずしうだから」

神通力を持つ人はまた命じました。

「お月さまになあれ」

男は希望どおり、月になりました。しかし

「これは太陽よりも暑いよ」

とつぶやきました。というのは、

「ずっと太陽の光をうけているんだから暑くてかなわないよ。もとのかじ屋がいちばんいいよ。かじ屋が一番だ」

というわけです。

しかし、今度ばかりは、神通力のある人がつぎのように答えました。

「わしはあんたにふりまわされて、かなわんよ。つぎからつぎへと変身して、月になりたいというから、月にかえてやったのに。いいかげんにしてくれよ。もとのかじ屋がいちばんいいといったって、もうごめんだ。そのまま月の中におれよ」

あなたが月をあおいでみたとき、月の中にかじ屋がいまだにいるのが見えるでしょう。

(小峰書店『タイ・ラオス・ベトナムの昔ばなし』より)

月の模様は 何に見えますか？



つち
鎚をふるうかじ屋か



もちをついうさぎか



かえる(中国、カダンバ)



たき木を背負う男
(ドイツ)

JVCNEWS

エチオピアチームに お客様

山田英晶さんは、エチオピアで活躍する協力隊員の一人だ。車両整備技術の向上に献身的に努力される一方、JVCの活動にも深い理解と関心を持たれ、様々な形で協力して頂いている。妻帯者は単身赴仕を余儀なくされる協力隊員。西宮にある法律事務所に勤めながら留守を預かる奥さんが、昨年十月、御主人を激励にエチオピアを訪問された。

そのエチオピア訪問の前に、奥さんの勤務先の吉岡夫妻がチャリティーコンサートを開き、JVCのために資金を寄せて下さった。心よりお礼を申し上げます。



ルーク農場で働く

羽田尚由さん

JVCが設立されてもうすぐ9年を迎える。初めは素人集団だった私たちもしだいに経験を重ね、現地に行くボランティアにも技術や専門性が要求されるようになった。昨年11月ソマリアに行った羽田尚由さんもそのひとりである。

羽田さんは1985年から88年8月まで協力隊の隊員としてスリランカで野菜を栽培していた。帰路エチオピ

アとソマリアをそれぞれ1週間ほどまわり、JVCで働くことを決めた。スリランカでもかんがい農業をやっていたのでソマリアでもその経験が生かせるのではないかと期待されている。

「モガディシュはスリランカに似ていて過ごしやすかったが、ルークではものすごい熱風を経験した。あんなのは初めて。でも、そんな所でも人々は生活を営んでいる。多分自分もやっていけるんじゃないか」

ソマリアの人材募集は本誌のはさみこみ、ほかのNGOや協力隊の機関誌など3回も見てしまったので、だんだん行きたくなったのだという。今JVCに来て、協力隊にいた時よりも「ぜいたくは良くない」と感じている。自分たちの活動資金は自分たちで集めなければならないからだ。

ソマリアに行っていて以来、今のところ羽田さんから便りはない。心配していた塩害など地力の維持、難民の組織化に奔走していることだろう。かつてソマリアチームを悩ましたソマリア病の声は最近聞かれない。JVCも図太くなってきたようだ。



新しく会員になった方々

(1988年4月1日～12月31日)

〔一般会員〕

遠藤美咲、井内秀明、富田千鳥、永田啓子、美谷島邦子、神谷直彦、大塚和人、平野 優、白石尚子、柿沼 潤、菊住 彰、井手輝二、鈴木明美、石川敏男、横堀克己、嶋田享子、W・F・ハナマン、永本淑子、伊藤久子、徳永倫子、松岡光宣、藤原将人、北野直子、守安康太郎、馬場裕子、鈴木理伊、KAZUO YOKOYAMA、大河内秀人、大井光政、福地孝子、伊従直子、鈴木謙二、原美智子、高橋悦子、楠本美子、仁科晴弘、丸橋 裕、和田正根、富田ひろみ、塚田純一、合田容子、吉山 崇、高須真理子、後藤くみ子、寺田守、長崎龍彦、岡村達司、尾畑裕子、多田良男、大住りお、二子石揚武、古沢豪彦郎、長野栄子、三田教会、元岡久美子、清永了純、高橋靖夫、

山本美穂子、今村 章、小原篤次、有吉紅也、波脇真弓、服部道雄、加藤雪彦、差形典子、石沢己行、岡本 正、内藤幸彦、織田隆夫、牧 俊彦、加藤美代子、萱嶋義正、浜澤寿一、池田研一、江橋 崇、中川清一、野見上さと子、田中愛、鈴木光郎、山本信也、川村君也、高須晋弘、金井二三子、前野博美、大竹財団、大野雅世、古屋 泰、大村泰樹、池島昭五、佐藤博子、〔活動者会員〕

今泉 恵、五十嵐勉、堀本隆保、遠藤栄子、鈴木康太郎、藤井敏子、熊沢ゆり、高萩綾子、鈴木由子、峰野美智子、羽田尚由、前川明宏、渡辺千和子、甲斐敬子、前田昌子、〔学生会員〕

長崎 淳、飯嶋住路、鈴木木綿子、田中研一、岩田美香、池田 温、伊木治子、石原伸一、田口 純、

尾崎和美、中野 治、田沼美知子、武居規子、富田充子、中村 毅、石井 治、吉田隆一、小林紀子、白井省司、芥田晃治、大西 薫、渋谷 恵、穂村恵子、今関理博、柿木光寿、神尾紀久子、久田信一郎、田中美幸、矢野純一、東村康文、荒木由紀子、鎌田啓介、田中 樹、遠藤 勉、三瀬順一、井谷智尚、山田聡子、山口陽子、石井朋子、山田 優、沼尾徳子、戸村 孝、中津将樹、南 健志、能智里美、

〔賛助会員〕

小山洋子、三浦準二、神崎瑞穂、野月政人、富沢淳一、菊地敏子、赤星公司、小金森勝治、増田さやこ、大西睦美、宮岡利之、中西清文、今野 卓、

〔団体会員〕

トヨタ通商

JVCプロジェクト

1988年12月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トリアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 毎月第2, 3土曜日 午後2時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介 (代表) 星野昌子 (事務局長) 熊岡路矢, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 加藤志保, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC神奈川)	神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション。		山口誠史,
日本国内	●定住難民プロジェクト 12月25日, 埼玉地区のボランティアが川口市の柳崎雇用促進住宅で, カンプチアの人々とクリスマスパーティーを開いた。このパーティーはCYRとの共同企画で行ったが, JVCでは今村年伸さんが中心となって行った。当日は団地内に住む9世帯のカンプチア人をはじめ, 合計100人の人々が集まり, 楽しい1日を過ごした。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金, 「国際交流 ボスピタリティ トラスト」, 日本 少林寺拳法連盟 特別養護老人ホーム「さくら苑」	山口誠史, 他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと, 毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助 (コレブを中心に) 1000mm近い降雨量を記録した大雨期が終り, 収穫期を迎えている。雨による作柄への被害は避けがたいが, 農民に笑顔と誇りが戻ってきた。1年4カ月に及ぶJVCの緊急食糧配給は11月に最終ラウンドを終え緊急事態は一応の終息を見た。 ●総合的復興促進 (マーシャ) 1. 植林, 土壌保全 7月中に山間部の土壌保全の植林を終え, その後, 村人たちに苗木を配り各家庭に植えてもらっている。 2. 母子保健・栄養 家庭菜園, 離乳食等の訪問形式による指導が母親自身の手で行われつつある。 3. 給水 清潔な飲料水確保のため, 泉の保護をしている。 種子銀行, 農業教室も引き続き行っている。 ●道路補修 豪雨により激められたアンバマリアム—マーシャ間の道路補修を12月に終えた。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動, 日本 少林寺拳法連盟, モラロジー MIRC, 東京グリーン・ウォーク, 西本願寺, ジャパン・タイムス, チャリティ・サイクル, Tree for lifeの会	鈴木直喜, 山田 盛, 伊藤達男, 伊藤幸子, イエットベルク, ソロモン, バレット, ダニエル, エシャトー, トーマス, シュクール

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	UNHCRは3月に打ち出した方針をさらに強く表明した。「10年近くも実施してきた緊急救援を1990年の6月末で完全にストップする。特に食糧配給に関しては、1989年から段階的に減らしていく」と。今後、難民たちは次の2つの道を否応なく選ばざるをえない。故郷に帰るか、ソマリアで自立するか。 ●農業による自立促進 農場の拡張は200haを越えた。しかし、1988年内にUNHCRが提供すべきポンプがいまだに納入されず、その影響が出ている。このルーク地区ではアメリカの団体(World Concern)とも協力しつつ農業プロジェクトを行っている。 ●植林 難民キャンプ内の植林のために、約3,400本の苗木を配った。 ●現金収入 水運び用のロバ車2台を農民と地域保護員に提供した。かじ屋、パン屋、靴屋、焼物屋を行っている。 ●コミュニティー・サービス フットボールゲームに協力した。	UNHCR, 仏国土をつくろう会	金子弘一、モハメット・アブディ、ムハボ、中野周二、磯田厚子、羽田尚由、モハメッド、ラシッド、アオキ、アブドラーヒ、アブディナサル、ヒレ、アブディカリム
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 初収穫があったものの、いくつかの作業が残っている。受水槽の改造、果樹の苗木作り、植林の拡張、収穫物の貯蔵方法など。	R.I.-Japan 創価学会青年平話会議	シュクリ
カンブチア プノンペン カンダール県	●サンタビエツプ技術学校／ワークショップ 現在までに、3台のトラックのエンジン・オーバーホールを終えた。中程度や簡単なオーバーホールを合わせると、合計60台以上のトラックを修理したことになる。技術学校では9月から第2期の研修が始まり、孤児院からも2名の者が参加した。自動車労連より寄贈されたフォークリフトが到着した。次回の6カ月コースのカリキュラムが完成した。 ●井戸掘り 農業省水利局の井戸掘りチームは、9月12日から井戸を掘り始めた。ワークショップ用の2本の井戸、トゥルタボン寺小学校の井戸はすでに完成した。プノンペン郡で2本の井戸を完成したあと、カンボット県で20本の井戸掘り活動を行う。 ●RINE(ライン)プログラム〔母子保健活動〕 ラインセンターの建物は10月3日に落成した。落成に合わせて、日本からJVCとSHAREの代表団が現地視察を行った。日本の病院より寄贈された光学顕微鏡が、保健省母子保健局に届けられた。各郡から32名が参加した年4回の保健スタッフ訓練が完了した。 JVC技術学校の交換部品購入資金などの支援を求めるキャンペーンを実施中です。資金不足のため建設が中断していたカンダール・ストウン郡小学校完成のための80万円カンパは四日市商業高校、モラロジ・MIRCの御協力で全額集まりました。建設を再開しました。ありがとうございました。	創価学会青年平和会議、モラロジ・MIRC、立正佼成会、自動車労連、西本願寺、善興寺ダーナ基金、高岡寺族青年会、覚法寺、「チャリティ・ワークかながわ」、日本少林寺拳法連盟、毎日新聞大阪社会事業団、大竹財団、東京都社会福祉協議会、国際ソロプチミスト千代田、明るい社会づくり運動神奈川県協議会、浄土宗東京地区青年会、和平基金、国際保健協力市民の会(SHARE) 仏教救援センター、四日市商業高校、日蓮宗事務所、横浜市「世界ふれあいキャンペーン」、「お告げのフランシスコ姉妹会」	簗田健一、簗田玲子、馬 清、釘村千夜子、古西 勇、〔カウンター・パート〕(運輸省) タック・カン、アム・ディエン、メアス・サメット、ゲット・ソーン、カム・ボラ(保健省) アン・サルン医師(カンダール県保健局) ニム・ニエム医師(農業省水利局) セン・ロー

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	①総務, 会計, 資金調達 ②各機関 (国連, タイ政府, 日本大使館, 各国民間援助団体) 及び東京事務所, 各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集, 広報活動 ④日本人主婦ボランティアとの連絡調整 ⑤季刊「ニューズレター」(英語, タイ語) の発行 ・12月2日, UNHCRとカオイダン・プロジェクトについてのミーティングを行った。 ・12月16～17日, カオヤイにてJVCタイランドのジェネラルミーティングを開催。新プロジェクトについての議論や各チームのレポートが報告された。	全国社会福祉協議会	ポンピモン・チャイブーン, カモン・ミンムアン, スンニー・テイチャリヤクン 熊沢ゆり チャタヴァデ・モンコン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 現在約4,000人の生徒が一気筒エンジン, 単車, 自動車, 電気などの技術修得に励んでいる。来年度から新たにウォーターポンプ, 竹細工, 漁具の3つのコースを増設し, 難民の本国帰還に向けての技術訓練をより充実させていく予定。現在国連と交渉中。UNHCRの発表によると, 来年1月ごろにカオイダンにいる約4,000人のイリーガル (不法滞留者) のバン・タット移動があるようだ。	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム, 清水俊弘, 大石道子
パナニコム (第三国定住待ち キャンプ)	●日本語学校 ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎 (読み, 書き, 聞きとり) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深めてもらう。	天理教千葉 R.I. - Japan	鈴木由子, 竹村雅義, アナン・ブダミリンパ ティーブ
地域開発 バンコク市内の スラム地区) (ブリラム県の M村)	●奨学金プロジェクト スポンサーに送る New Year's card を子供たちに作らせている。 ●クロントイ図書館 12月17日に主婦ボランティアの企画でクリスマスパーティーを行った。 ●スラム生活改善プロジェクト NGO間のミーティング (1日, 4日) 及び地主との話し合いに参加した。 ●農村開発 農業教室を開いている。 ●その他 南部の洪水犠牲者のためにスラム住民の寄付による古着, 食糧などを送った。 ピッサヌローク県で植林プロジェクトのための調査を行った。	モラロジー-MIRC JOFIC, We Love Asia Tree for life の会 雄勝町町内寺院 会 国際ソロプチミ スト駿河	ワティット・チャンスリ ャオン, サムルアイ・ジ ョンヨークラン, リーラ ・クンナロン, コメン・ スンスマン 今泉 恵, ガームシン・ロンクン
ラオス (ヴィエンチャン)	●生活改善指導員養成プロジェクト 母子保健, 幼児教育, 家政一般, 農業等の基礎知識・技術の普及を通して農村地域の復興と自立を促す。ヴィエンチャンに上記の知識・技術を教えるセンターを作り, 地方の婦人を対象に生活改善指導員を養成する。 現在はヴィエンチャンで保健省, 教育省, 農業省の協力の下にラオス婦人連合と共同で養成コースのカリキュラムを作成している。養成コースは89年3月から始まり, 89年末以降指導員の農村での普及活動を多面的に支援する。	庭野平和財団 難民と地球の緑 を考える会	谷山博史, 前田初江

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援 (金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (12月小計 208,500円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (12月小計 694,797円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (12月小計 45,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (12月小計 919,455円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (12月小計 130,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (12月小計 290,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (12月小計 69,500円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (12月小計 20,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (12月小計 162,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (12月小計 341,785円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (12月小計 612,393円)

編集後記

▶昨年の後半はリクルート問題で大揺れだった。土地は庶民には遠く、政治はさらに遠い。日本は専制国家でもないし、誰でも政治に参加できるはずだ。それにもかかわらず、私たちの手の届かないところすべてが決められてしまう空しさを感じた。それには、「いかがわしい」政治を遠くへ追いやってしまった自分たちにも責任があったように思う。

「どうしてNGOが市民に根づかないのだろう」とボヤクことがある。外国の人々とおつきあいを外交とか何とかエライ人にお任せして安穩としている人々を齒がゆく思うからだ。でもよく考えてみれば、政治を遠くへ追いやった自分と根っこがつながっていることに気づく。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)

加入者名—JVC 東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497

(12月小計 1,187,987円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

1989年1月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 FAX:03(835)0519

Telex:7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川国際交流協会内 ☎045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。